

-----  
中村和弘

2024年2月号

<象形文字>

鳥糞の白さも今日の淑気かな  
青空のまわりは暗し野梅咲く  
兵馬俑を紅く染めたる初日かな  
象形文字に神の字は無し初山河  
山津波隆起陥没初山河  
東海の松風も入れ七草粥  
裏山に狐鳴く夜の母恐し

-----  
陸・この20句 中村和弘選

2024年2月号

ペガサスまで黄金のさざ波芒原	岩崎 嘉子
延暦寺砦のごとし冬満月	吉本のぶこ
武蔵野へ頬紅おいて冬はじまる	瀬間 陽子
落葉搔き二尺の蛇を搔き出しぬ	山本高分子
猫達の凝視する窓小鳥来る	小竹ヒサ子
満ち足りし風の色なり吾亦紅	十亀カツ子
おにぎりは神の形に初時雨	上田 桜
古墳より眺むる街の冬ぬくし	牧 ひろし
鳥海山の裾の晩菊ひとつかみ	大類 準一
みどりごを忘れぬ乳房雪もよい	佐々木貴子
グラタンの焦色冬の来たりけり	安住 正子
くれないと「紅」を読むとき雪解風	藤川 夕海
オオカミ像見入つてからの秋思かな	前塚かいち
裏山は日と風のみち木の実降る	佐々木玉枝
流木を研ぐ海鳴りや神無月	別所 弘子
銀色の満月草に潜みをり	清水山植子
玉砂利にどんぐり混り宮参り	西村 敏子
色変へぬ松はめでたくつまらなく	小長光吟子

鶴亀の力石撫ぜ末枯野  
実石榴の口開けて居りサロメ舞う

正木むさを  
平 仲子

-----  
大石雄鬼

2024年2月号

<冬の港>

猫実川汗のやうなる鯨およぐ  
署名には冬の港のたたずまひ  
顎よりも硬く真冬の船簞笥  
甲板の匂ひはひらいてゆく白菜  
五百羅漢の頭のなかでコート脱ぐ  
心臓はまだうす暗く松の内  
松の内パジャマの袖のちぢこまる

-----  
第六回口語俳句作品大賞受賞作品

オモニ

母

朴美代子

名古屋市在住・所属「主流」「陸」「菜の花」

オモニ

「母故郷に帰ろう」日本海に散骨す  
掴むものなくて己をつかむ鳶  
風に老う鳥の目と合う花の昼  
足の指反らしてさみし蝶の昼  
言葉なんぞ目刺の頭噛み砕く  
木の実独楽回りつくせば失語症  
北風に頂きました永住権  
菊ならばつめたいほどの白がいい  
赤とんぼ風の泣く朝生まれたの  
木の葉時雨紙一枚の本籍地  
今日も過去折鶴の首かたく折る

オモニ

折鶴の胸ふくらます母の忌  
吸い飲みに水が半分秋に入る  
夕顔の種をくれたる人も病む  
生まれかわるならとんぼうとまる草がいい  
頭痛はげし鯨が泣いているのです  
死ぬときは朝顔白く咲く時間  
鼻の骨つめたい生きているらしい  
我が柩小窓閉じれば北風止む  
泣きにゆく母の胸ほし匂ほし

-----  
中村和弘

2024年1月号

<孤 鶴（こかく）>

親不知子不知の道石露咲けり  
サバナの象の鼻瘦せ冬早  
水没林の骨のごとくに冬日かな  
冬眠の熊に宇宙の底光り  
湾岸にタンク連り冬ざるる  
船長室の神棚に揺れ注連飾  
初春や檻の孤鶴の汚れおり

-----  
陸・この20句 中村和弘選

2024年1月号

桃は赤児メロンは母のゐるところ	大類つとむ
塵芥寄する渚さの淑気かな	吉本のぶこ
彗星の先つぼさみし千歳飴	瀬間 陽子
瘦せ秋刀魚みんな黙して食すなり	小竹ヒサ子
温室に筒抜けの天秋の声	十亀カツ子
無人の世桂紅葉の薫りたり	小川 葉子
秋の野のサイロひとつに暮れにけり	牧 ひろし
オーロラ	
極光の北海道に馬鈴薯を植ゆ	今田 克
動くもの見えぬ牧場や草の花	田中 眞青
みちのくの畦によろけて虫時雨	小保方京司
この檻褻は縹々夫人の浴衣帯	木村 詩織
自ずから水澄む水となりにけり	多摩川 州
オオカミ像見入ってからの秋思かな	前塚かいち
庭園に土橋石橋小鳥来る	根岸三恵子
翳雲めがけ跳び込むスケボーダー	北原 千枝
石蹴りの宇宙は地べた草紅葉	山田和歌子
秋澄むや詩集は白き鳥と来る	別所 弘子
夜田刈を終えて川面のビル明かり	伊予 守

白露かな衣桁にひらく能衣裳  
篠笛の背すじ調う秋祭

小長光吟子  
平 仲子

-----  
大石雄鬼

2024年1月号

<封筒>

靴墨をのろのろのばし天の川  
封筒のふくらむやうな運動会  
秋夕焼にくひこんである父の顔  
蟋蟀の胸のちひさな国家かな  
菊咲いてもう動乱の匂ひする  
飾り窓を棒のやうなる冬の虹  
カーテンの痣のうつすら冬葦